
川上 陽介 (かわかみ ようすけ)



【書名】春琴抄
【著者】谷崎潤一郎
【発行】新潮社（新潮文庫）

若い頃には、すべての文章を書き写し、丸暗記してしまいたいほど好きになってしまう作品があるものなのでしょう。私にとっては、谷崎潤一郎の『春琴抄』や、芥川龍之介の『手巾』『龍』『お時儀』『馬の脚』『大導寺信輔の半生』などが、まさにそのような作品でした。

『春琴抄』の文章は、句読点が極端に少なく、皆さんが自分で文章を書くときには決して真似をしてほしくはない、あまりにも個性的で、しかも古典的な文学性に満ち溢れた作品ですが、個人的には、どうしても真っ先に推薦せずにはいられません。日本語という言語のもつ芸術的表現力を、極限にまで高めた谷崎潤一郎という名文章家の傑作として、『細雪』『猫と庄造と二人のおんな』『鍵』『卍』『少将滋幹の母』『潤一郎訳源氏物語』『文章読本』などとともに、じっくり味わってほしい作品です。

『春琴抄』は、昭和8年（1933）、著者47歳のときに発表されました。富山県立大学附属図書館には、新潮文庫版のほか、『谷崎潤一郎全集』全30巻（中央公論社、1981～85年）が揃っています。

【書名】三四郎
【著者】夏目漱石
【発行】角川書店（角川文庫）ほか

この作品は、大学生のうちに、ぜひとも読んでおきたい1冊です。「夏目漱石」という名前を知っている大学生は、今からすぐに読み始めてください。

漱石作品のなかで最も有名な『吾輩は猫である』については、むしろ学生時代よりも、大学卒業後にじっくり読み直したほうが、隅から隅まで存分に味わえるのではないかと、私は常々思っています（もちろん、『猫』を学生時代に読んでも構いませんし、私自身は、分からないながらも中学生向けの必読シリーズで、ほんやり楽しく読んでいた記憶があります）。しかし、『三四郎』は、大学生だからこそ共感できる面白さが、いっぱい詰まっている作品です。

東京帝国大学に進学するため、熊本から上京した小川三四郎君が、何を目指し、何を考えながら、どこでどのような生活を始めるのか。『三四郎』『そ

れから『門』と続く漱石三部作の主要なテーマは、私見によれば、恐らくは皆さんが抱えている最大の関心事と同じ、「女」です（または、「異性に対する心の動き」です）。そしてさらに、それぞれの作品には、漱石特有の文明批評、知性やウィット、癩癩^{かんしやく}までもが溢れ出します……。

ぜひ学生のうちに、三四郎とともに東大キャンパスを歩いてください。大学のキャンパスには、魅惑的な謎の女だけでなく、引っ込み思案の自分を引っ張ってくれる頼もしい親友や、恋敵^{こいがたき}の物理学者なども登場します……。掛け替えのない青春時代を、思う存分、生き抜いてください。

【書名】水滸伝^{すいこてん}

【著者】施耐庵（松枝茂夫 編訳）

【発行】岩波書店（岩波少年文庫）

四大奇書の一つである『水滸伝』の物語は、これまでに何度もテレビドラマ化され、中国では2011年に全86回に及ぶ超大作が放映されたばかりです。とりわけ、中国中央電視台が制作した1998年版『水滸伝』（中国全土の平均視聴率45.91%）のエンディングテーマ曲は、108人の豪傑たちの野性的な心意気を見事に表現しており、実に味わい深く、忘れがたいものです。

豪快無比で、時には乱暴きわまりない豪傑たちによって練り広げられるこの庶民的なアクション活劇をまだ堪能したことのない人は、とりあえず岩波少年文庫版のやさしい日本語訳で、いや横山光輝氏の漫画文庫『水滸伝』（全6巻、潮出版社、2005年）でもいいでしょう、楽しくスピーディーに鑑賞することをお勧めします。そしてまた、テレビドラマ（1998年版）も必見です。

【書名】漢字と日本人

【著者】高島俊男

【発行】文藝春秋（文春新書）

小学校では「十冊」という漢字の読みを「ジュッサツ」ではなく「ジッサツ」と教えています。確かに「五十歩百歩」という言葉を辞書で調べてみると、「ゴジッポヒヤッポ」としか出てきません。しかし、それは私たちが普通に使っている日本語の発音とは異なります。それでは、なぜそのように「不自然」なことが起こっているのでしょうか。

日本人が「漢字」という外国語（中国語）の文字を使い始めたときから、日本語は実に「不自然」な歴史をたどることになりました。この本は、そのような言語の歴史を、著者独特の、明快で分かりやすい、実に皮肉っぽい口調で、しっかりと教えてくれます。

高島俊男という方は、実はその世界では有名な人。きわめて専門的な話を、誰にでも分かるように説明する術に長けています。その主張はかなり極端なものです。一考に値するものばかりです。『お言葉ですが…』『本が好き、悪口言うのはもっと好き』『漱石の夏やすみ』『水滸伝と日本人』など、氏の珠玉のエッセイ集をお薦めします。

【書名】「甘え」の構造

【著者】土居健郎

【発行】弘文堂

日本文化とは何か。日本人らしさとは何か。新渡戸稲造の『武士道』から、土居健郎の『「甘え」の構造』に至るまで、世の中には数多くの日本文化論が出回っています。真の国際人としての教養を身につけたいと考えている人は、手段としての英語学習だけではなく、日本文化、日本社会、日本人の精神構造について、一度は考えてみてほしいと思います。

手っ取り早く日本文化論の概要を知りたい人は、大久保喬樹著『日本文化論の系譜』（中公新書）、佐伯彰一・芳賀徹編『外国人による日本論の名著』（中公新書）の2冊を流し読みし、そこから自分の疑問に答えてくれそうな本を1冊選び、しっかり通読してください。私のお薦めは、『「甘え」の構造』のほか、^{イオリオン}李御寧著『「縮み」志向の日本人』（講談社学術文庫）、そして上記ガイドブックには紹介されていませんが、鈴木孝夫著『ことばと文化』（岩波新書）です。

【書名】笑いとユーモア

【著者】織田正吉

【発行】筑摩書房（ちくま文庫）

「笑い」について、これまで真剣に考えたことのある人。あるいは、「お笑い」芸人になりたいと、少しでも考えたことのある人。いやいや、「お笑い」芸を見て、一度でも心の底から思っきり笑ったことのある人。ぜひ一度、この本を手にとり、「笑い」の構造をしっかりと理解してください。

実はこの書、アリストテレスやショーペンハウアー、ベルクソンやフロイトによる「笑い」の考察に匹敵するほどの名著です。しかも作者は、哲学者や心理学者ではなく、「れっきとした」ラジオやテレビのお笑い番組の制作スタッフだった方。

本書は、数百年に一度、日の目を見るか見ないかの、類い希なる1冊です。今すぐAmazonで買ってください。



和字功過自知録 12丁 表

- おもき^{やまひ}病をすくふ 一人十善 ○かるき^{やまひ}は 一人五善 ○薬^{くすり}をほど
 こすは 壹ふく一善 ○りやうじ^{じつ}をほどこすも しん美^{かいほう}に介抱するも同じ善也
 ○かしたる金銀をゆるす 百銭一善



和字功過自知録 11丁 裏

父母に仕へうやまひてよく養ふ 一日一善 ○殊更に悦び 或は楽しみ給はゞ
 一事 別に一善 但し養へども父母の心二よこび給はざれば 善にあらず
 ○家業を由断なく能動る 一事一善 ○過を後悔してかならず改る 一事一善

〔増補和字功過自知録〕安永五年(1775)序、川上陽介蔵本)

【書名】 名著講義

【著者】 藤原正彦

【発行】 文藝春秋（文春文庫）

藤原正彦という数学者が、文学や歴史や国家に対して、どのような考えを抱いていたか、あるいは、お茶の水女子大学の教員であったこの数学者が、学部1年生向けの読書ゼミで、いったいどのような授業を行っていたか。本書は、そのような、他大学の授業の1コマを垣間見せてくれる、ゾクゾクするような1冊です。もし本学でも、このようなゼミが開講されていたとしたら、皆さんは参加したいと思いませんか。